

ヒヨドリの子いちゃん

岡山市立御野小学校

四年生 岸本結依

「見て見て。」

おばあちゃんがうれしそうにろう下からよんだ。わたしと弟は、すぐにとんで行った。

「もっとしずかに来て。親鳥がにげちゃう。」

わたしたちはあわててそうと走った。おばあちゃんが指さした方を見ると、庭の木に小さな巣があり、その上で鳥がすわっていた。

おばあちゃんが、

「ヒヨドリがたまごを温めているんだよ。うまれるのが楽しみだね。」

と言った。わたしはうれしくなって、

「いつ生まれるの。」

と聞いた。おばあちゃんは

「それは分からないなあ。」

と言った。わたしはもううまれたかな、まだかな、と何度も何度も見に行った。でも親鳥は巣をはなれずに温めているままだった。その日にはたまごはかえらず、そのまま家に帰ることになった。

数日後、おばあちゃんからひながかえったと電話があった。お母さんは仕事だったので六日後におじいちゃんとおばあちゃんが家までむかえに来てくれた。おじいちゃんの家に着くと、真っ暗になっていた。すぐにヒヨドリを見に行くと、ひなたちの上に親鳥がのってひなは見えなかった。

「夜は気温が下がるから親鳥が羽を広げて、温めてあげているんだろうな。」

とおじいちゃんが言った。弟が

「ええ。夏なのに暑くないのかな。息できるのかな。」
と言った。

次の日の朝見に行くと、二羽が巣の横のえだにとまっていた、一羽は巣のふちにとまっていた。わたしは走って、

「三羽もう巣立ちそうだよ。」

と弟に教えた。弟は急いで巣を見に来た。二人でよく見ると、一羽だけ小さくて、巣にへたつとたおれているひなが見えた。おばあちゃんに知らせると、おばあちゃんがあわててベッドから起きて見に来た。

「こんな早く巣立つんだね。死んじゃってるのは悲しいけど、昨日来れてよかったね。」

と言った。三羽は親鳥といっしょに飛んでいった。うらの山の方で鳴いているのが聞こえた。その後何度か見に行ったが、親鳥のすがたは見えなかった。

昼前に見に行くと、死んでしまっていると思ったひなが少し動いたように見えた。よく見ると、息をしておなか動いていた。わたしと弟は

「動いた。まだ生きてる。」

とさげんで、おばあちゃんのところへ走った。きゃたつを使ってひなを巣の外に出した。すぐに植木ばちの所へ行き、ブルーベリーをちぎって、ピンセットではさんであげた。あげるときは、口の横をつつくと、口を開けたので、ブルーベリーを口の中に入れることができた。弟が、

「やったあ、食べた。」

と言った。おばあちゃんに、ひなを入れる箱がないか聞くと、たらいを出してくれた。わたしは巣と同じような材料を山に取りに行った。たらいに草をしいてふわふわにして、取ってきた木の皮の毛を丸めて、巣と同じようなものを作った。ひなを中に入れると、ぴいぴい鳴いた。わたしと弟で、ぴいちゃんとおぶことにした。畑にバツタをとりに行ったり、お水を少しずつ飲ませたりした。ぴいちゃんは元気に鳴いたり羽をバサバサしたりした。

夜になって、お母さんがくると、

「野鳥は拾ったりかたりしてはいけない。」

と言った。いっしょにどうしたらよいかインターネットで調べて、拾ってはいけないことや、巣立ちの後も親鳥といっしょにいて、生きるためのことをたくさん学んでいることを知った。お母さんが自然の中では死んでしまうことも自然のルールだということも教えてくれた。わたしはぴいちゃんが死んでしまいかもしれないと思うとなみだが出た。弟はずっとかえるならかいたいと言ったが、もどさないといけないと思った。みんなで相談して、わたしたちは今日家に帰るので、おばあちゃんたち

に明日の朝、巣にもどしてもらうことにした。もし親鳥が来なかったら、ほごセンターに電話して聞いてみることに決めた。ぜったいに親鳥がもどってきてぴいちゃんのことを育ててほしいと思った。

次の日、おばあちゃんが巣にもどすと、ぴいちゃんは何時間も巣の中で鳴いていると聞いた。昼すぎに、親鳥がもどってきたと連らくがあった。ぴいちゃんは夕方に巣から飛んで地面におりた。親鳥が上から鳴いておうえんすると、ぴいちゃんは親鳥といっしょに飛んでいった。わたしは本当にうれしかった。ぴいちゃんの声に気がついて、帰ってきてくれた親鳥にありがとうと思った。いつかぴいちゃんが親鳥になって、もどって来ないかな。